

なのはな通信

第4号 2000.7



編集・発行

勤医会東葛看護専門学校

〒270-0174 千葉県流山市下花輪409

TEL 0471-58-9955 FAX 0471-59-7055

発行責任者 小澤 清子



基礎看護技術演習・1科一年生

若者が誇り持てる国に

学校長 三上 満

少年の犯罪が、世間の耳目をあつめていた。「私たちは二度この世に生まれる。一度めは存在するために二度めは生きるために」ルソーのエミールの中にある言葉だが、十七才といえばまさに第二の誕生の激しい陣痛のさなか、自分の生きる道、あゆんでいく方向を見定めようと、どの青春も必死だ。

愛知の十七才は、残念なことに、「人を殺す」ということを「やりとげてみたい」目的として、自分の中に据え実行してしまっただけに苦悩の中にあつても、それが許されないことは言うまでもない。

同時に、そんな目的しか若者に持たせることができなかった社会、教育、政治のあり方に、みずから問うべきものはないのか。

ある高校生の集まりで、ひとりの高校生の痛切な訴えを聞いた。「私たちが夢や希望をもてるためには、私たちのまわりに、魅力ある大人がたくさんいることが必要なんです！」十七才の犯罪は、もつとも鋭く激しく自己の行末をみつめている時、行手をさし示す大人がみつからなかった非運を示している。

折しも南北朝鮮の首脳会談があつた。歴史的な握手や抱擁を、目の熱くなる思いで何度も見た。あきらかに平和的解決の方向へ歩み出そうとする両国民の意志が首脳を支えている。この道はコソボにも、チエチエンにもエチオピアとエリトリアにもつながらている。朝鮮でできたことが、他でできない筈がない。その意味で二十一世紀へ向う歴史的な大ニュースであつた。

考えて見れば、いま現実味を帯びてきたこの道を、原理の上でも早くかかげたのは、この日本ではなかったのか。もしこの日本が、この二十一世紀へ向う平和への流れの先頭に、憲法九条をしつかりかがけて進む国になつたら。人々はどんなにこの国を誇りに思うだろう。何よりも多感な青春は、きつとこの国の歩む道と自分の明日を重ねてみるに違いない。そういう大志を若者たちと、今こそ共有しなければならぬ。

2000年度教育活動

主な学校行事、教育活動は次の通りです。

2000年度教育活動（4月～7月）

	学校行事	1科1年(6期生)	1科2年(5期生)	1科3年(4期生)	2科1年(6期生)	2科2年(5期生)
4月	7日 始業 8日 第6回入学式 1科36名 2科40名 25日 防災訓練	26～27日 合宿交流	「生命活動」 の学び	7日 地域フィールド 発表	17～18日 合宿研修	
5月		12日 病院探検	25～26日 生命活動発表	15～6/2日 各論Ⅳ実習		24～9/22日 各論実習
6月	2日 第6回体育祭		5～23日 各論Ⅰ実習	26～7/14日 各論Ⅴ実習	在宅看護論 フィールド	
7月	7日 千葉県下看護 学校体育大会 20～8/20日 夏期休暇	4日～5日 基礎Ⅰ実習 13日 基礎Ⅰ実習 発表	17日 各論Ⅰ実習 ゼミナール	↓	在宅看護論 フィールド発表	

今後の予定（8月～3月）

	学校行事	1科1年(6期生)	1科2年(5期生)	1科3年(4期生)	2科1年(6期生)	2科2年(5期生)
8月	21日 始業					
9月	8日 防災訓練		8/28～9/14日 各論Ⅱ実習	9/19～23日 研修旅行	「生命活動」 の学び	↓
10月	9/30～10/1日 第6回東葛祭	16～20日 基礎Ⅱ実習	9/18～10/6日 各論Ⅱ実習	10/10 研修旅行発表	生命活動発表	10/10～13日 研修旅行 研修旅行発表
11月	18日 2科推薦入学 試験	基礎Ⅱ実習 発表	13日 各論Ⅱ実習 ゼミナール 15～12/10日 各論Ⅲ実習	10/16～11/10日 総合実習	10/23～11/10日 基礎実習	各論 ゼミナール 11/19日～ 総合実習
12月	4日 第6回 キャビンゲルモニ 6日 県下看護学生 研究発表会 26日 1科推薦 入学試験 25～1/8日 冬期休暇		4～22日 各論Ⅲ実習	14日、15日 総合実習 ゼミナール		18～19日 総合実習ゼミ
1月	9日 始業 19～20日 1科Ⅰ期 入学試験	15～2/2日 基礎Ⅲ実習			基礎実習 シンポジウム	
2月	2～3日 2科入学試験	↓	19～21日 地域フィールド	25日 看護婦国家 試験		25日 看護婦国家 試験
3月	3日 第3回卒業式 6～7日 1科Ⅱ期入学試験 19～4/2日 春期休暇	基礎Ⅲ実習 発表				

自治会 だより

学生の学ぶ環境をよりよくするために、学生の要求や願いを知り、その要求を実現していこうと、学生自治会は考えています。そんな中、以前より学生から要望のあつた昼食販売を、業者に入ってもらい、五月から始めました。安くておいしいものをと、業者と話し合いを重ね、二カ月前より開始しました。初めての試みで、少々混乱もあります。でも、学生みんなのナマの声を聞きながら利用しやすいように、改善していこうと考えています。また、数年前からの要望だった、校内の喫煙コーナーの設置を実現しました。学生の中には喘息の人もいたり、「医療従事者の喫煙はいかがなものか」という意見もあります。喫煙する人もいない人もいるみんなの学校です。みんなが生活しやすくなるよう、どんな

ん意見をもらい、学生みんなで学校づくりをしていきたいと考えています。

学生自治会では、学生たちの眠っている要求、思っているけれど口に出せないことがあるのではないかと考えています。そのねがいを知るためにアンケートを実施したらどうかかと考えています。意見箱に投書される意見を持つのではなく、こちらから学生の要求を知ろう、そうしないと本当の要求実現はできないのではないかと思えます。年齢も人生経験もそれぞれ違う人が集まっている学校です。いろんな意見があるのは当然です。学生の率直な意見をもらい、大いに議論して一致する要求や課題で団結し、その実現目指して行動していこうと考えます。そんな学校、学生自治会を目指しています。

今、十月に実施される東葛祭に向けて東葛祭実行委員と協力して、成功するようとりくみを始めました。昨年の東葛祭の運営から学んだことを参考に、楽しく思い出に残る東葛祭を目指してがんばっています。

学生自治会会長 前田 梨絵

校内体育祭のニコマ



1位・1科2年生



2科1年と三上校長

高齢者 フィールド の学び

四月十二日から二週間ずつ、二クルに分れて高齢者フィールドの実習を行った。その中で、四十二才という若さで脳幹部梗塞、ロクドイン症候群の〇氏を通し、重度の障害を持ちながらも「自宅に帰りたい」と願う〇氏の在宅療養を支え少しでも力になれば、〇氏を受け持つ事で『〇氏らしく生活するためにどう応援してゆけばよいのか』クラス皆で考えてゆけたら…。そんな中、〇氏の退院三日前より実習がスタートした。緊張と戸惑いの中、学生は必死で処置の手法を覚え、コミュニケーションボードをマスターし、少しでも〇氏の思いを知りたいと失敗にもくじけず、何度も挑戦した。シフトを組んで入れ替わりやってくる八名の学生に、「学生によつて方法が違う」と泣いて訴えていた〇氏。退院前の不安と興奮の中、学生の思いに

応えてくれた〇氏の器の大きさに脱帽だった。

痰の多さと微熱から、体調を崩しての再入院は覚悟の上での退院だった。退院日はあいにくの小雨だったが、愛犬の出迎える中十ヶ月ぶりの我家に戻り、テレビの上の埃の山に笑い、「やっぱり嬉しい」とボードで示し顔をゆがめた〇氏。

自宅に戻つてからの〇氏は、心配されていた熱も出ず、痰の量は少なくなり、夜間、夫が起きる事はめつたになかった。愛犬と遊びたいと自らずすんで車イスに乗車し、わずかに動く左足で触れ合ったり、学生の話に全身で大笑いする〇氏。日常生活の動作一つ一つがリハビリとなった。息子の食事の心配をしたり、「カーテンを洗つて」とヘルパーに声をかけたり、母として、主婦として生き生き生活する〇氏に接し、『一人の患者さんと見ていたが、家に帰ると普通のお母さんと同じなんだ。家庭を持つて暮らしている人なんだ』と学生達はレポートに記している。

しかし、四月からの介護保険導入により、その当り前の生活をしてゆくことが、〇氏にとつて難しい事が明らかになった。介護度五の〇氏は、三十五万八千三百円までは一割負担で済む。しかし、〇氏の一ヶ月の療養費は七十万円を超える多額であり、介護保険分を除いても四十万近くの自己負担金が必要です。在宅に戻つた事で〇氏の願いは叶えられたものの、

の、経済的理由から〇氏は再入院が施設入所を余儀なくされる状況となった。学生達は、〇氏の当り前の願いを今後も支えてゆくためにどうすればよいのか考え、流山市が予算化している全身性障害者介護人派遣制度を獲得できるよう病院と一体化して組織的に市に働きかけた。学生が日中交替で〇氏宅へボランティアというかたちで入ることで四十万円負担金が削減されるという事実から、制度獲得まで授業や実習を保障しあつて応援しようというクラスへ提起した。クラス討議では、自分達が行く事で負担金が減り、〇氏が〇氏らしく暮らせるなら行きたいという思いもあるが不安もある。今後の学びはどうなるのか。先の見えないところでよしやろうとは言えない。〇氏だけ特別なのはおかしい。という率直な意見がだされた。二年ちよつと学んできて、福祉の矛盾がわかつてきたが具体的にどうしていいかわからなかったが〇氏を通して頑張りた。介護保険について学んで声をあげてゆきたいと、どのグループも言つていたから是非行動をおこして頑張りた。金額が大きすぎて現実的に考えられなかったが、自分の親の収入を考えると人事ではない。〇氏だけが特別というわけではなく、今後続く重度の障害を持った人でもその人らしく生活する事が保障される制度を勝ちとつてゆくためにも各論V実習の前までは皆で学びを保障し

あつて交替で〇氏宅へ何う事となつた。

市との懇談の末、六月から全身性障害者介護人派遣制度は導入される事となつたが、制度の中身は、介護保険との重複はできないとの理由でこの制度での日中のヘルパー導入は不可能であり、〇氏の全面的な負担金軽減には至らなかった。しかし、朝七から九時のヘルパー導入は今迄の半分弱の負担金ですむようになり、その分入浴サービスを週に二回導入し、訪問看護を充実させられる結果となつた。〇氏の体調が安定している事、筋力がupしADLが向上した事などからヘルパー導入の時間を削減し、ケアプランの見直しを図り、少しでも負担金を軽減できるように検討している。また学生は、〇氏を高齢者フィールド以降も受け持つことにより、『〇氏が在宅で暮らす事によつて夫、息子、愛犬、ヘルパーや学生がおり人とのふれあいの時間が増えた。学生と接してゆく中で「楽しい」との声が聞かれ〇氏のやる気につながり、学生がいるだけで治療効果を上げていたと感じた。笑顔もたくさんみられるようになり〇氏自身から愛犬と遊びたいために車イスに自ら乗るようになり、生き生きとし、本来の姿である〇氏らしい生活が送れているように思えた。この事を通して在宅の優位性が改めて実感でき」と述べている。

地域 フィールド の学び

四月八日入学式、看護第二科六期生四十名の学生との出会いの日です。

二科は、既に准看護婦の資格を持った仲間が、正看護婦の資格を取る目的で入学してくるため、社会人として、仕事や子育てを経験しているベテラン看護学生と、高校の衛生看護科を卒業したばかりの学生達の集団です。

名前も顔も知らない学生同志が、入学四日後から、在宅看護論の位置付けで、グループワークが開始されます。

白衣を脱いで家庭に訪問させていただき、『地域の人々の生の声から、人生・健康・医療についてお聞きし、看護を考えていこう』という授業です。病院での実習や、仕事を通じて患者さんと関わる経験はしていますが、家庭の中に入って生き方や、生活の生の声を捉え、医療・看護の役割を



考えることは一見難しい作業に感じます。

しかし、実際に訪問してきた学生達の声は教員一年目の私の不安を吹き飛ばすものでした。その一端を紹介します。

訪問ニュース New Voices よ

・「百歳とは思えないほど元気です、色々な話をしてくれてとても勉強になりました。」

家庭も介護を苦痛に思っただけ、とてもよい環境で在宅での生活を送っていました。今までは違った視点で高齢者を見る事ができました。」

・「介護する夫と介護される妻の相手を思いやる心がとても心に残りました。行動範囲が限られた生活で不満が多いと思っていました。とても幸せそうに生活され、自分自身考えさせられる事がありました。」

『感想レポート』より

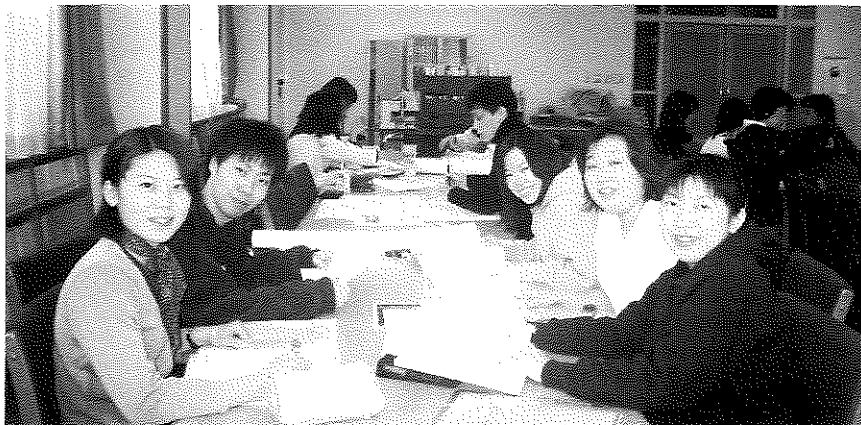
「看護婦としてはではなく、学生としての訪問は、違った目で物を見る事ができ、ある意味新鮮さを感じ、言葉一つ一つがストレートに入ってきた。…その一言で私は、今まで自分が生きてきた事を改めて考えさせられる一つの大きなきっかけになった。訪問したI氏に感謝したいと思う。」

また、生命の偉大さ、命への執着、そして死への恐怖、戦争を体験してきた方の多くが語られるこの事は、二度と戦争は起きてはいけない、というメッセージの様に受けられる。…」

学生たちは、初めての訪問に緊張し、硬い表情で地域の方と対面します。しかし、お話を伺う中から次第に相手の方を理解し、新しい発見をする力をもっているのだと、学生を通じて、学ぶことの意味を教えられる毎日です。

六期生の学びは、まだ始まったばかりですが、四十人の仲間と共に助け合い成長して欲しいと思います。

(2科1年担任 生田 知歩)



現在四期生は最後の各論実習の真つ只中。O氏からの学びをふまえ、受け持ち患者さんと真正面から向き合っただけではない。井上 裕紀子

(1科3年担当 井上 裕紀子)

介護保険実施 3ヶ月

四月一日より介護保険制度がスタートした。訪問看護の現場では、二ヶ月頃からかなりのパワーを使って準備にあたってきた。しかし、始まる二ヶ月前だというのに制度自体がはつきり決まっていない。国民に知らされていないばかりか、ケアーマネージャーにも情報がこない。一つのサービスが一回いくらになるのかもなかなか決まらなという有様だった。

三月後半になって、詳細が決まり、おお慌てでケアプランの作成に取り掛かった。どここのサービス事業者も今までの業務をこなしながらの準備のため、日常業務が終わった午後五時から夜の九時、十時まで電話が鳴り続けるという毎日だった。電卓と電話、紙の山との格闘は今でも続いている。

国会や市議会ではお役人が「介護保険は順調にスタートした」と言っているが、本当に現場の状況を知ら

なすぎる。

そんな苦勞も利用者の方たちに有益となれば報われるのだが、どんなに看護婦の専門性を生かし、悪化の予防や自立にむけたケアプランを作ろうが、高齢者や障害者の少ない年金の中から、また不況やリストラの危機にさらされている家族の生活の中から一割の負担は早々できるものではない。「自己負担は多くても一万円以内に留めたいのでその範囲でサービスを組んでほしい。」「これでは何のための介護保険なのかわからない。」「といった声をたくさん頂いた。具体的には、入浴サービスはこれまで市の福祉サービスとして無料で



行われてきたが、一回の入浴の自己負担が一二五〇円となった。医療保険での訪問看護も老人はこれまで一回基本利用料二五〇円が四月からは三〇分未満四二五円、六〇分未満八三〇円、二十四時間電話相談をでき必要に応じて訪問看護する体制については全額医療保険で対応していたが、四月からは月一三七〇円となった。訪問看護の料金が一割となると、負担も多くなるため、本当は一週間に一回か二回は看護婦が入った方がよい状態でも月二回の三〇分未満で「具合だけ見てくれれば良い」という依頼も増えてきている。

要介護五のAさんの場合

入浴サービスと訪問看護を利用	
①介護保険開始前	
入浴サービス	月三回 〇円
訪問看護	月四回 一、〇〇〇円
合計	一、〇〇〇円
②介護保険開始後	
訪問入浴介護	月三回 七五〇円
訪問看護	月四回 二、四九〇円
緊急時訪問看護加算	一、三七〇円
特別管理加算	二五〇円
(方テール装着のため)	
合計	七、八六〇円

Aさんの場合四月以降のサービス量はまったく変わっていないが、利用料は七・八倍となっている。Aさんは妻と障害をもつ息子さんとの三人暮らしである。Aさんの年金だけ

では家賃や生活費が賄いきれず、寝たきりのAさんをおいて介護者である奥さんは働きに出ている。ただでさえきびしい生活に介護保険が追い討ちをかける。九月までは、介護保険料の徴収が先送りされているが、十月からは、三人分の保険料も徴収され(六十五歳以上の場合は半額)さらに家計を圧迫する。「一万円くらいまでなら何とかやりくりする」と懸命にがんばっているが、将来のことがとても不安だと話している。

たんぼ訪問看護ステーションでは、五月に入り利用者に対しアンケートを実施した。八割以上の人が、「利用料の負担が増えた」と、回答している。実際にどの程度負担が増額したかの問いには、「七、〇〇〇〜一〇、〇〇〇円」という人が四十六%、「二〇、〇〇〇円以上」という人が二十%であった。

介護を社会全体で支えるはずの介護保険が、結局は国民に負担を押し付け、個人の経済的基盤にまかされている。利用料の問題だけでなく、限度枠の問題、認定の問題、サービス基盤の問題等々、介護保険は開始直後から様々な問題が火山の様に噴出している。

この介護保険をより良い物にしていくために様々なデータや利用者の声を集め、大きな声にしていく事が、必要である。

(たんぼ訪問看護ステーション)

所長 内田 てる美

石田前校長の ご冥福を お祈りいたします

石田先生と初めてお会いしたのは、一九八二年でした。

私が流山に引越して東葛病院に就職する時です。

先生は、初対面の私に「本当に勤まるの？」と厳しい表情で言いました。

その日から、十数年経ってそのことをひよいと思いついて先生に訊ねたことがあります。

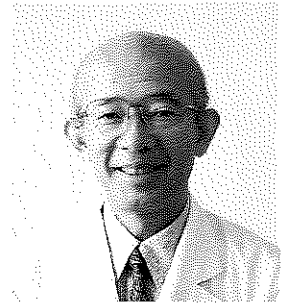
「なぜ、あんなに冷たかったの？」と。

「そんなこと言った？」とまるで憶えていません。

よほど頼りなく思ったのでしょうか。地域の大きな期待を集めて開設した東葛病院。わずか一年後に倒産状況に。そして再建運動。

そのときから、当時副院長だった石田先生の活動は大きく変わっていきます。

まず、診療のかたわら医師体制の確保に奔走することになったの



です。そのなかで、「再建のためには、民医連に支援をお願いするしかない。」と支援要請の活動を始めます。そして、九三年まで十年に及ぶ民医連からの支援が続き、九十年には民医連加盟が実現しました。

また、病院建設時に資金協力をしていただいた約三〇〇〇人の方々に対して、全職員でお詫びと報告の訪問活動を毎年行なうことになり、先生は毎回必ず一〇〇件を訪問していました。

東葛病院の再建運動に関わって、「波瀾万丈の刺激的な人生を味わった」と話していた先生。人生の第三楽章で学生のみなさんと過ごせたことが、さらに味わいのある豊かなものになっていったことはまちがありません。

勤医会看護部長 堀内 洋子

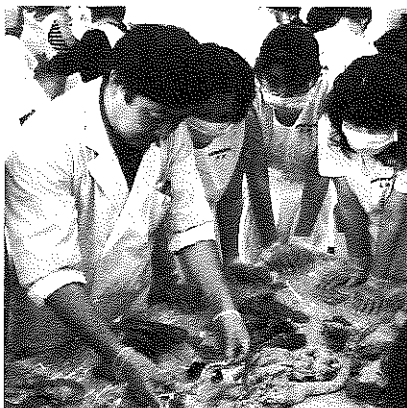
講師紹介



東葛病院副院長 下 正宗

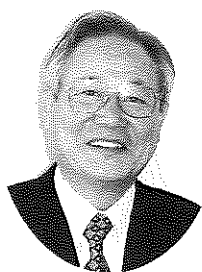
開校以来、二科の解剖学、病理学と一科の病理学を担当しています。解剖学は人体を理解する上で基本的な科目です。「解剖学」名前の暗記「大変」という図式がありますが、日常生活でも地名や道がわからないととても不便です。なぜ、東葛地域なのか、流山市の名前の由来などを考える前に普段使っていると名前は三歳の子どもでも覚えてしまいます。名称がとっつきにくいのは「専門用語」が沢山できて日常生活から離れているからだと思えます。ある程度学生さん達には暗記の苦痛を強いていますが、名前を思えることが楽しくなることとなるような講義、覚えていたことが明日から役立つことが実感できる「解剖学」を目指しています。

病理学は、時間が足りずに困っています。総論と呼ばれる「病気のしくみ」の部分に時間をかけていますが、なかなか理解が難しいようです。



「聞いて忘れて、見て覚え、行つて理解する」ということばがありますが、講義を聴いても忘れるということを前提に頭を使う講義を進めています。

よろしく 新任校長紹介



学校長 三上 満

学校の横、江戸川の土堤を歩いて
いると、ふつと想いが湧いてきます。
川の流れのようにさまざまなことに
出会いながら、人生を歩いてきたな
あーと。

生れは東京の赤坂。三味の音がす
る粋な街、たいへんないたずらっ子
でした。中学一年の三月十日、東京
大空襲で焼け出され、富山の田舎へ
疎開。思い出しても切なくなるよう
なひもじさの日々でした。終戦後、

やっと東京に戻り、もとの中学に復
学。いきなりのテストで、最下位に
近かったのを忘れられません。アル
バイトしながら大学を出て教師の道
へ。

悩める子ども、つっぱり荒れる子
どもとも、四つに組んでつきあつた
思い出多い日々でした。生徒たちは
みんな「満さん」と呼んで親しんで
くれました。いちばん初めの教え子
はもう六〇才、定年を迎える年にな
っています。

一九八一年、私は乞われて、東京
都教職員組合（都教組）の役員にな
りました。全都に吹き荒れていた中
学生の非行を克服する運動を、推進
するためです。「子どもたちに愛と
厳しさとはげましを」、私のつくつ
たこの言葉は、東京の教育運動全体
の合言葉になりました。

その後全日本教職員組合の委員
長、全国労働組合総連合（全労連）
の議長などをつとめ、くらしや雇用、
社会保障や平和を守る運動の先頭に
立つてきました。一九九五年一月、
阪神大震災の直後に、バイクの後部
席に乗って雨の中被災地に入り、激
励と救援にかけつけたのは、生涯の
思い出のひとつです。民医連の医師、
看護婦の献身的な活動も目のあたり
にしました。

そして一九九八年秋から翌年の四
月まで、短かいけれど激烈な、人生
の第三楽章を経験しました。革新無
所属の都知事候補に推され、半年間

文字通り都内を駆けずり回つたので
す。テレビ出演も二〇回に及びまし
た。「大型公共事業に湯水のように
税金を使い、赤字を生み出し、社会
保障や福祉や教育を犠牲にしている
逆立ち政治を正そう」「ガイドライ
ンで戦争をする国になるのでなく、
アジアの一員として、信頼される平
和の首都東京をつくらう」「受験競
争をなくし、子どもたちにゆとりと
自由をとり戻そう」、都民の願いを
背に受けて懸命に訴えた、これらの
訴えは、今でも生きていると思つて
います。

そして激しかった日々も終り、少
しくつろいでいる頃、民医連からの
おさそいがあり、この学校の校長を
引き受けることになったのです。石
田前校長が郷里の福井へ戻られると
の事情を聞いて後任を引き受けたの
ですが、まさか石田先生が亡くなら
れるとは思いませんでした。

こうして私は今、人生の第四楽章
の中にいます。組合役員のとくも、
都知事候補のとくも、いつも最後は
教育の畑に戻って若い人たちと過ご
したいと思いつづけていました。そ
の念願がかなつたのが、不思議のよ
うな気がします。

「ぼくあんな大きな闇の中だつて
こわくない。きつとみんなのほんとう
の幸いを探していく」

「銀河鉄道の夜」の中でジョバン
ニが叫ぶこの言葉を生涯の銘にし
て、これからもがんばってゆきます。

編集後記

六期生を迎え二〇〇〇年度がス
タートしました。1科・2科各1
年生の合宿交流は、この学校で出
会つた仲間が、親睦を深めこれか
ら二〜三年間共に学んでいく土台
を築くよい機会になりました。1
科二年生「生命活動の学び」では、
「本当に理解していないと伝えられ
ず、夜遅くまで学校に残る日が続
いたり辛いこともありました。
しかし、この学びでみんなが学び
理解することのすばらしさを学ぶ
ことができました。私たちの体は
繊細だけど、自分の意志とは関係
なくもくもくと働きつづけている
素晴らしい生物、これからは体を
いたわろうと思います。」と述べて
います。又、2科二年生の研修旅
行事前学習・三上校長の講義の感
想では「なぜ戦争をするのか戦争
で得をする人がいるのか疑問だつ
た」「日本は選択をせまられた時
間違つた選択をし続けてきたのだ
と思つた。今度はぜひ正しい選択
をと願うばかり。」と学んでいます。
夏期休暇を前に、授業に実習にと
大車輪の毎日です。今後とも学生
たちの成長への応援をよろしくお
願います。

学校通信編集委員会

江島典子、二瓶幸江、小澤清子